

王觀堂靜安先生 校注本

「長春真人 西遊記」

訳注

杉山 二郎

謹んでこの拙き訳書を
王観堂静安先生の
御霊に捧ぐ

前 言

わたくしは今マルコ・ポーロの所謂「東方見聞録」をユール、コルデイエ校本と、パウティエ校本、更にムール・ペリオ校本の三本を基礎に訳注の業に従つて来た。もちろん、厳密な訳注でなく、沙州敦煌辺りから暇にまかせての抄出考注だったが、昨今漸く本文を終り補遺の部分に筆を進めている。東博在勤の頃から玄奘師の「大唐西域記」のわたくしなりの考注に従っているうち、更に五百年後に中央アジアを東進したマルコ・ポーロの旅記が屢々顔を見せるのみでなく、二十世紀初頭の西域探検者が駱駝の背に携えて行つた文献の一つと云うこともあり、その嗜読を出勤前の一仕事として試みたのによつてゐる。歲月は何時か二十余年を越えて考注の業を樂しんできた。マルコ・ポーロの嗜読は当然のことながら、蒙古史元朝史への関心を唆り、多くの内外研究書にも手を伸すに到つた。マルコ・ポーロのみならず、カルピニ、リュブルク、オドリコ、クラヴィホら西方遊行者たちの紀行文に親炙し参照しているうち、中国から西域に元朝時代に西進した人たちの居るのが判つて来た。耶律楚材湛然居士の「西遊録」、劉郁の「西使記」、孫仲端の「北使記」、それにこの長春真人の「西遊記」などがそれである。劉郁の「西使記」は欽定四庫全書提要本を書写して、その語彙の地名物産その他に考注を施してみたのが始まりで、西瓜の中国輸入の経緯その他に興を得たことを鮮かに想い出す。

一方、清朝考證学者王静安觀堂先生には「觀堂集林」所収の「胡服考」以来嗜讀して、先生の全集を架蔵するに到り、第十二冊に「蒙韃備録箋證」「黑韃事略箋證」「聖武親征録校注」「長春真人西遊記校注」があつたので、その考注嗜読のつもりでぼつりぼつり訳述して行つたのがその縁起である。既に岩村忍氏が「長春真人西遊記」の訳を試みて居られた。昭和二十三年三月筑摩書房刊、一八〇頁がそれであつた。その冒頭に解題があつてこの

著作の経緯、研究の次第が略述せられていて、便利である。この書冊は今日では稀本の部類に入っていて目睹し難い。しかし流布本として「世界ノンフィクション全集」第19（昭和三十六年八月、筑摩書房刊）に岩村氏の訳文がそのまま収載せられているので、容易に入手可能となった。その解説は地理的知識の發達史として所収のクック、コロンプス、耶律楚材、長春真人に広く触れているので、旧著の解題がより詳密と云うことになろう。そこで一部を抄する。

長春真人西遊記は道教全眞派の祖師長春真人邱處機が、チンギス汗の命によって山東の海邊を發し、蒙古の北邊を経て中央アジアに至り、遂にヒンドウクツシユ山脈の附近に於て汗に謁し問に答へた後、歸還した前後三年に及ぶ行途を門人李志常が記述したものである。李志常は長春高足の弟子で、字は浩然、號を通玄大師と稱し、これまた全眞道教史に於て逸すべからざる人である。長春の歿後、宋道安繼ぎ、次で尹子平（此の兩人も西遊に随伴してゐる）代り、李志常が更に後を襲つた。志常は元の憲宗マング汗の八年（西曆一二五九年）に卒するまで二十有一年の間全眞教門の事を掌つた。此の間に有名な道佛の諍があり、佛徒は道士が各地の佛寺四百八十二を占據し、老子化胡經及び八十一化圖等を偽作し佛教を誹謗したと稱して訴へたので、マング汗は少林寺裕長老を首とする佛徒と李志常等道士の輩をカラコルムの萬安閣下に對決せしめるに至つた。此の對決に於て李志常等破れ、寺院三十七を佛家に還し、化胡經等を毀つことを命ぜられた。李志常はこれによつて忿を發して卒した。右は釋祥邁の至元辨偽錄に記すところであるが、遽に信用は出来ない。由來僧徒は自ら見て異端となす者を謗るに醜詆を極むることは、既に我が國及び禹域に於て他に幾多の例が存するからである。（中略）

さて次に西遊録の書誌学的経路について少しく語を費やさなければならぬ。西遊記の傳本は近年まで頗る稀有であつたが、錢大昕が乾隆年間に蘇州の元妙觀で道藏中にこれを發見し、阮元がこれを抄して秘府に進め、後道光年間に徐昔伯、程春廬・沈子敦等が考訂し、次で連筠簪叢書に収められた。（郎案「中國叢書綠録」2子目、

史部地理類に「長春真人西遊記、二卷、元李志常撰、道藏（正統本、景正統本）正乙部、指海（道光本、景道光本）第十三集、連筠篔叢書、皇朝藩屬輿地叢書第三集、道藏拳要第七類、道藏精華錄第十集、叢書集成初編、史地類」と挙げてゐる。王國維の校注本が出るに至つて始めて此の書は漸く近づき易くなった。（中略）

西洋人は割合早く此の書に注意を拂つてゐる。即ち十九世紀末以來、Palladius, Remusat, Bretschneider, 等々は各々摘譯がある。但しウェーラーの訳は詩賦のみを省略してゐるので、最も完全に近い。今日我々が此の中央アジア史地上頗る貴重な書を読み且つ樂み得るのは、上記の錢大昕以來王國維までの禹域の諸先生、パラディウス以下ウェーラーに至る西洋の東洋学の諸先達の賚に外ならない。

我が國では西遊録は専門の東洋学者たちによつて案外注意されなかつたらしい。最も早くこれに眼を著けられたのは幸田露伴先生で露伴全集を見ると随分早い頃からこれに觸れて居られることがわかる。そして先生の逝去直前に上梓された「音幻論」の序には

「今は烏有になつたけれども、小石川の舊書齋の硝子障子の上に、いつの頃したこととも覺えないが、墨で、天台畫觀、竹鹽論、八荒箋、夫白命、音幻、邊中、又秘、雪兔、長春西遊、アイルラント、兀离、祈、善才、天真一目、香、單、等の文字をしたためて置いた」と見えてゐる。論仙の諸編によつて露伴先生の道教に関する造詣の一端は視はれるが、參同契に関する文を最後として遂に永年調べて居られたらしい長春西遊を始め道教關係についてお考を發表されずに長逝されたことは遺憾此の上もない」（前掲書二一—二二頁）

此処に蛇足を加えるなら、露伴先生の晩年の考證隨筆を好んで嗜読したわたくしにとつて、先生の「龍姿蛇姿」（昭和二年一月改造社刊）の不兎罕山以下の戯曲作品が、序文にある様にチンギス汗誕生前後を扱つていたことに、目を瞠つたことがあつた。先生は云う、「不兎罕山以下、怪傑誕生に至るまでの教編は、元史、元朝秘史、元史譯文證補、聖武記、忙豁侖紐察脫卜察安譯書、土耳其人蒙古史譯書、蒙古遊牧記、朔方備乘、日本陸軍省撰

蒙古圖、及び其他の史籍雜書等に據つて大豪傑成吉思汗の誕生に至るまでの事情を幻燈映画的に映出せんと企てたもので、其間に虚妄と作爲とを挿むことを十分に避けたから、極めて少しの趣向を附加へたことはあつても、何折の何地の情景は何の書に本づくかと問はるれば、一々其の出所を答へ得るのである。」と序文で指示されている。この戯曲執筆中に萌したかは明らかでないけれど、長春真人西遊記に著目研究されたこと当然であつたに違いない。さすれば先生の麗筆になる西遊記訳文も腹案にあつた筈で、岩村氏の言の如く遺憾この上にないと云わなくてはなるまい。

わたくしは、研究的に取扱つて訳述し、王觀堂先生の注記と、ブレットシュナイダー氏の訳注を逐一訳述し、尚ヘンリー・ユール、アンリ・コルデイエ氏補注の「マルコ・ポーロ紀行」の注記の繁瑣末梢のスタイルの響みに倣つたから、多くの識者の自明の事象に拘泥して自ら納得した冗文が多い。これは上梓に當つて削除すべきであつたかも知れない。こうした作業の余滴が書冊になることは、現代においては稀有奇蹟に近い。そこで我儘を許して貰つてその一部を上梓することにした。識者の寛恕を願うと共に魯魚の誤謬の叱正されんことを。

平成辛巳歲 彌生桃の節句の日

杉 山 二 郎

凡 例

- 一、長春真人西遊記訳注の順序は、原則として原文、口訳、王静安氏注補を「王観堂先生注」とし、次にブレットシユナイダー氏の訳注「ブレットシユナイダー氏訳注」の順序に王氏の文章節次に従って記述する。
- 二、王氏補注、ブレットシユナイダー氏の訳注中に「郎案」とするのは杉山二郎の注記である。
- 三、「郎案」に尚多くの補注訳文を挿入してあるが、行換えによつて明瞭ならしめた。
- 四、長年月に渉る訳注作業故に多少の錯乱があるかも知れぬが、印行に付するに当り体裁を整えた。
- 五、尚「中國歴代地名要覽」は青山定雄氏篇の再刊本（一九六五年六月大安刊）で、内容は算用数字、例えば12、8、の如きは讀史方輿紀要の巻数を示したものである。
- 六、尚始め「西遊記」本文と王観堂先生注記の漢文を載せず、直ちに口訳したが途中よりその原漢文を掲げ、四十頁以下、全て記載した、体裁整わないがその蕪雅を許容されんことを。